

報の集め方、どのような順番で作業を進めていくかなどは、先生の指導をきちんと受けながら、クラス全体でも一緒に学習するらしい。

どの教科でもグループ・ワークは行われているようで、それが好きな先生のクラスだと半年にも及ぶ大きな課題に取り組んだりするが、2、3ヶ月ですんでしまうものまである。子ども達の経験を聞いてみると、大きな課題を出されると、さすがに完成させるまで皆が真剣に取り組むとは限らないから、きちんと課題をやらない子どもがグループの中にいたりすると、大変だったと言う。そんな場合はどうするのかとたずねると、やはり、割り当てられた作業が進んでいない分は、やれる子ども達でカバーする事になるらしい。この話を聞いてみると、グループの一員としての自覚を身に付けていくのは、子ども達皆、というわけではなく、どうもこのタイプの子ども達のようなのだ。

ところで、長女のトラブルの基となった成績の付け方なのだが……。成績は、グループ・ワークを始める前に、カテゴリ毎の評価点がどのようにつけられるのか、課題と共に発表されるシステムなのだそう。長女の場合、二人で完成しなかった場合の評価点がカテゴリにあったのかどうか分からないが、その点がはっきりしなかった事と、よしんば二人で協力し合わなかった事が低い評価に繋がったのなら、それは自分だけではないでしょうと言う、不公平感から生じたトラブルだったようだ。

長女からグループ・ワークの成績の付け方に納得できないと不満をもらされたとき、正直なところ、成績のことぐらいで……。と言うのが私の気持ちだった。だが、このグループ・ワークについていろいろ知ってみると、長女が納得できなかったのは、受けた評価の点数のみならず、自分の学習態度に対して、決められたルールに従って正当な評価がされなかった事があったのだと、理解できた。

☆

数年前、「総合的学習の時間」に英語を取り入れようとする、ある日本の教育委員会の職員の方たちにお供して、アメリカの現地の高校の見学をお手伝いしたことがある。それには生徒達のインタビューも含まれていた。質問の内容は、「何時間くらい勉強するか」、「どのような勉強が好きか」等、様々

だった。それに対する生徒達の回答の中に、「個人とする宿題や勉強よりも、グループ・ワークの課題が好きだ」と言うのがあった。その理由が、「自分では思いもつかないような意見が他の生徒から出たり、自分一人だとなかなか手がつけられそうにない難しい課題でも、協力者がいると作業がやりやすいからだ」と言うのだ。また、「いろんな人の意見を聞いたり取り入れたりする事で、自分の能力が高められる」と。これは、グループ・ワークをポジティブに考えた生徒の意見だ。なるほど、グループ・ワークでそのような成果を得ているのだとしたら、なかなか良い学習方法なのだろうと感心したものだ。

アメリカでは、小学校から始められる簡単なものから高校の高度なグループ・ワークを通じて、与えられた課題に対して役割分担し、情報収集し、協力しながら完成させることの意義を、きちんと生徒達に理解させながらやらせているのだと言うことを、我が家の子ども達や、この高校生の話からうかがい知る事が出来る。

☆

我が家の子ども達やこの高校生の話は、グループ・ワークという言葉から連想していた、「単純に皆で同じものを作る」といった、それまでの私自身の意識を変えてしまった。

長女のトラブルに思わず巻き込まれてしまったが、ほとんど無関心だった我が家の子ども達の、アメリカでの日々の学習を理解する機会をもらった。

(トラブル、その三につづく)

松本 康子

まつもとやすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。

編集長から一言

グループ・ワークで子どもがトラブルに遭遇した経験を通して、グループ・ワークに関しての様々なルールや日米の違いなどを知った経験です。

子どもの身近なトラブルを通して、保護者として、現地校での教育に対する認識を深めることが、自分自身は体験したことのない、アメリカの教育で学ぶ子ども達をサポートすることになります。